

ポンコツ 怪しい薬を飲んだら……

マインドルフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カクとイムラは魔王軍・・・勇者と戦うこともあるが、日々くだらない仕事をしていた。

目次

ポッコツ	怪しい薬を飲んだら……	1
ポッコツ	怪しい薬を飲んだら……	2
ポッコツ	怪しい薬を飲んだら……	3
ポッコツ	怪しい薬を飲んだら……	4
番外編	夏海 前編	20

ポンコツ 怪しい薬を飲んだら……

イムラとカク……持っていた万能アイテムが無くなり……カクが取りに行くことになった。

道具屋へ着くと万能薬の棚にあるはずのアイテムを探した

カク 「あつ、これかな？」

ニシノ 「あああ、それは………毒だよ」

カク 「何で!? 万能アイテムがある棚に毒が!？」

ニシノ 「見える所に置いとかないと忘れちゃうからね……」

カク 「いや、だからって万能アイテムの所に置くの止めて下さいよ……俺が欲しいのは、いつもの万能アイテムなんですよ」

ニシノ 「ああ、ああ、いつものね……いつもの万能アイテムは……作りたてホヤホヤのがあるよ……」

カク 「作りたてホヤホヤ?……」

ニシノ 「そう……作りたてホヤホヤ……あとは毒もね」

カク 「いや、毒はいらないけど……その作りたての万能アイテムください」

カク 「は万能アイテムを貰い、イムラの待つる所に向かった……」

ニシノ 「新しい毒………試したかったね……ん?ここにあった『赤い薬』が無い………」

イムラ 「遅かったじゃん、どうしたの?」

カク 「いつもの万能アイテムが無かったから、できたてホヤホヤのを貰ってきた」

イムラ 「できたてホヤホヤって何だよ……まあ有ったから良かったじゃん……早速だけど仕事行くよ」

カク 「え………行くの!？」

イムラ 「『えー』長いなあ、でもアイテムも手に入れたし……」

カク 「あーだるい………んっ!この万能アイテムで、疲れが取れ

ないかな?」

イムラ「えっ、そりゃあ万能アイテムだから疲れ取れるんじゃない……」

カク「ん、よし一回試しに飲んでみるわ!」

イムラ「えっ飲むの? まあ万能アイテムだから体に害は無いと思うけど……」

袋を開けると、黒の丸薬があり……その中に1つだけ色違いの赤い丸薬があった……

カク(何これ……この赤の……まさか毒?)

イムラ「何固まってんの?」

カクは咄嗟にその赤い丸薬を飲んだ……

イムラ「じゃあもう飲んだし、行こうか」

カク「……ちよつと待て……」

イムラ「何?」

カク「飲んだのは飲んだけど……全然回復しないんだけど……」

イムラ「えっ? 回復しないの?」

カク「うん、全然……!!」いきなり体が光り始めた……

イムラ「えっ!! えっ何!! カク? 大丈夫?」

カク「ん、何だよもう、今のは……」

イムラ「えっ?」

カク「んっ? どうした?」

イムラ「ええ、と、どちら様で?」

カク「はあ? 何言ってるの? 俺じゃん……んっ?」

声がいつもと違う……声が高くなったような……それと視界がいつもと違う……それに何だか胸が重い……気になって胸を見ると………「な・な・な・なんじゃこりゃー!!」

驚くのも無理はない……カクの胸は大きく膨らんでいたのだ! 「イ・イムラ〜! お・俺の胸があ〜でかくなってらう〜!!」

結構冷静なイムラ「カク、今お前……どういう姿になってるか……分かってないの?」

カク「はっ? 姿?」

イムラ「俺の体を鏡代わりにしていいから…見て」

カク「えっ何、何が映るの…誰？この女は？」しかも、ヒト型の魔物になっている

イムラ「……………あなたですね……………っていうか女になってるよ、お前……………」

カク「えっ？…いやいやイムラさん、それはあり得ないでしょう…あつつもしかして……………」

イムラに万能アイテムの袋に入っていた赤い丸薬の話をした。

イムラ「うん、まあ分かった…赤い丸薬のせいでお前が女になってしまったのは分かった……………うん…ここで待つといて」

不安そうなカク「はっ？イムラ何処に行くの!？」

イムラ「何処に行くつて……………ニシノさんの所に行つて元に戻る薬をもらってくるんだよ…その姿で勇者とばったり会つたら……………確実にヤバくなりそうだから……………ともかくここで待つてて、すぐ戻ってくるから」

カク「ちよつと…待てイムラーツ!？」

カクはイムラの帰りを仕方なく待つ…

カク「ここで待つしかないか……………それにしても…でかいなあ俺の胸は……………」しみじみと見て、試しに揉んでみる（まさか初めて触る胸が自分の胸だとは……………）

今、カクの着ている服はズボンと靴と腕鎖を付けているだけ…あとは裸「さすがにこれだと変態だな…胸だけでも隠すか……………よし手で隠そう、手ブラだ」

あれこれ遊んでいると、誰かがやって来た…目を凝らして見てみると（あれは！一天王のカツラギさん!?!何でここに!?!）

本来ならば四天王だが、この時はカツラギ1人だけの一天王である…カツラギはそれを ひどく気にしていた

カクは急いで木の陰に隠れた、（そのまま通り過ぎろ!）

カツラギは通り過ぎるところか、その場で止まった「気配がする

……そこに隠れているのは分かっている……おとなしく出て来い！」
カク（バレた!?!）

木の陰から覗いてみると岩に向かってしゃべっている……「上手く隠れたと思っただか!! はははははははははははははははは!! 馬鹿め!」

カク 「いや、お前が馬鹿だよ……」

カツラギ 「どうした、びびって出て来れないか……」

カツラギは岩の後ろを見た……そこに居たのはウサギだった……

カク（うわああ、カツラギさんのあんな冷めた顔は初めてだ……）
う思っていると突然、風が強くカクに当たった

カク 「ハ、ハクション!!」可愛い声でくしゃみをしてしまった……

カツラギ 「後ろか……!!」すごい早さでカクの居る木へ移動して来た

カク 「ヤバイ! 逃げろ!」しかしすぐに腕を掴まれた!

カツラギ 「捕まえたぞ……女?……」

カク（ヤバイ、捕まった!）

カツラギ 「お前……なぜ、服を着ていない?」

カク 「えっ?……」

カツラギ 「お前……変態か?」

カク 「違う! その……着る物が、無いんだよ!」

カツラギ 「はっ?……まあ何だ、そんな格好してたら話はずらい……取り合えずこれを使え……それで胸を隠せ……」そう言って首に巻いていた赤いスカーフを渡した

カク 「あ、ありがとう」と言って胸に巻き着けた（ん! 待てよ、カツラギさん俺がカクってことわかってないなあ……そうだ!）「痛いー! いつまで……腕を掴んでるんですか!」

カツラギ 「あっ! ごめん」

カク 「あ……もしかしたら腕の骨が折れたかも……」（これは慰謝料だな……）

カツラギは眉間にしわを寄せながら「ちなみに、どのくらい痛いんだ?」

カク 「え?……えーと……右につまずいて転んだくらいかな」

カツラギ「ほー、なるほどな…」と言ってカクに近付く

カクは後ずさりしていくと木にぶつかり：「ちよつ何を!？」抵抗しようとして腕を振り回した

カツラギが目の前まできた「腕が折れているのなら、なぜ、そんなに動かせるんだ？」

カク「あつ…」（しまった…）

カツラギ「はっははははは！嘘が下手だな…」

カク「……」

カツラギ「しかしまあ、お前みたいな間抜けな女初めて会ったぞ！」カク（いつまで喋っているんだよ…）

カツラギ「四天王であるこの俺を騙せると思っていたのか、馬鹿め！」

カクは段々イラついてきた「うるさい！、何が四天王だよ！この一天王！ひとりぽっち！」

カツラギ「……は？……」今迄とは違う怒った顔になり

カク（ヤバイ、つい出ちやったよ）

カツラギは勢い良く木に手をつくるとカクの顔を覗き込み「お前……今俺の事…なんて言った？……」

カク「いや……あのー……」

その時イムラの声が聞こえてきた

イムラ「おーい！戻ってきたぞ！何処行つた？」

カク「……イ…イムラ……」

カツラギ「チツ！」

カクに顔を寄せ耳元で「今度会つたら、それ返せよ…」と言い離れて行った…

カクが憔悴しきつた様子で草むらから出て来た…

イムラ「どこ行つてたの…あれ？その赤いスカーフどうした？」

カク「イムラ……お前遅いんだよ！遅い！」

イムラ「いきなりどうした!？」

カク「つたく……それより戻る薬は？」

イムラ「それなんだけどね……………無いんだって……………」

カク「……………はあ？」

ポンコツ 怪しい薬を飲んだら……2

カクとイムラはもう一度ニシノのところへ、元に戻る薬はないか聞きに向かった

カク 「どうして、無いんだよ!」

ニシノ 「あれはねえ……タマタマできた物だからね、そんなにすぐにはできないねえ……」

イムラ 「そこを何とかできないんですか？」

ニシノ 「何とかね……まあ、何とかやってみるけど……あっつ……」

カク 「何?何か思い付いた?」

ニシノ 「新しい毒ならあるよ……」

カク 「もう……毒はいいから……」ニシノの店を出た……ああ、これからどうするんだよ……俺」

イムラ 「まあ今、悩んでいても元には戻らないから、これからの事を考えようよ」

カク 「お前さあ、人の事だと思ってよくそんな事言えるな?」

イムラ 「あーごめん」

カク 「……軽いな」

イムラ 「まあ明日休みだから、これからの事を話そうよ」

カク 「せっかくの休みなのに何でこんな事になったんだ……と落ち込んでいる

イムラはカクをジッと見ながら「……もしかしてそのスカーフ一枚しか持っていないの?」

カク 「えっ?そうだけど……」

イムラ 「いや……そうだけどじゃねーよ、他に着る物無いのかよ!」

カク 「だって、生まれてから1度も上の服なんて着たこと無いし……」

イムラ 「じゃあ明日、服屋に行って上の服買ったら……」

カク 「そんな事言っても……ゴールドが無い……」

イムラ 「……仕方ないな、ほらっ ゴールド」

カク 「えっ!?!いいの!?」

イムラ 「ただし、服買う以外は使うなよ!」

カク 「……えー」

イムラ 「えーって、他に使うつもりだったのか?」

カク (カジノに使うとは言えないな……) 「いや……そんなんじゃないけど」

次の日、カクは服屋に行った。

カク 「来たのはいいけど……どれを買えばいいんだ……やっぱり女の服かなあ〜」

店員 「お客様、何かお探しですか?」

カク 「えっ? いやあ〜俺に似合う服を……」

店員はカクを上から下へ眺めると「はい……それでしたら、この服はいかがでしょうか?」

カク (うるさいんだよ……服くらい、自分で選ぶつうの!)

店員は次々と色んな服を勧めてくる……

カク 「値段は………たっ高い、こんな服が!」(この店員……高い物ばかり見せてきやがって)

定員 「お客様気にいった物はありませんか?………消えた!!」

服屋から出ると「もうこんな服屋来ねえ! つぶれちまえ!」と毒づいた……

カクは色々見て回ったが……段々面倒臭くなり(もういや、家にあ
る適当な布で胸隠そう……)

カクはイムラと待ち合わせをしている武器屋へ向かった……一番の
近道は、大きな公園を横切つて行くルートだ

歩いていると、どこからともなく声が聞こえてきた(ん? この声は
……) ふとそちらを見ると(うわあ〜、ここで何してんの!)

カツラギは剣を振り回して「はあ! はっあ! はあ! はっあー!」
カク (こんな所で必殺技の練習をしてるのか!?)

カツラギはちよつと気取つて「もうちよつと迫力が欲しいなあ……」

カクはカツラギの後ろを静かに通ろうとした…すると、カツラギは剣を振りながら格好良く、くるつと回ろうとして「あっ！お前！」

カク（…見つかった!?!）

カツラギは体勢を戻し腕組みすると「また会ったな…私のスカーフを返しに来たのか、それとも私が必殺技ポーズを練習するのを見に来たのか…」

カク「いやあく、ただの通りすがりで…」そつとその場を離れようとする……

カツラギは素早くカクの前に立ち塞がり「待て……」

カク「な、何つ？」

カツラギ「私に言う事があるんじゃないのか…」

カク「えっ?カツラギさん、まだ怒ってる?」

カツラギ「当たり前だ、知らない女に一天王と言われただけではなく、ひとりぼっちと……」いじられた事に腹を立てている…

カクは又も思わず「いやあ、一天王は本当の事じゃん…それにさつきも1人で練習してたし…」

カツラギは怒つてカクの胸につけていたスカーフを掴み取った!

カクは慌てて胸を押さえて「ちよ、ちよつと!?!返して!」

カツラギ「返して?何を言っている、このスカーフは元々私の物だぞ…それにお前、私の事を一天王と言ったな、そんなことを言う女に貸す義理は無いな!」

カク「何だよ…四天王がそんな事をしていいのかよ!」

カツラギはカクの目と鼻の先に顔を近づけると「じゃあ…お前は四天王である私にあんな暴言を吐いていいのか?…私に謝るか、そのままでの姿でいるかだ…どうする?」

カク（あーもう!何で俺が!）「ごめん…」

カツラギ「ごめんなさい、四天王のカツラギ様だろう」

カク（うぜー）「……………」

カツラギはニヤニヤしながら「どうした…早く言わないと誰かが来

てその姿を見られてしまうぞ……」

カクはうつむき小声で「……………」

カツラギ「何だ、聞こえないぞ……」

カクはカツラギの胸ぐらを掴み引き寄せると耳元に近づき「ごめん……なさい……四天王の……カツラギ様……」

カツラギ「エイッ!」カクはカツラギの首根っこを強く噛み、カツラギが持っていたスカーフを手に取ると、もの凄い勢いで走って逃げた!

カツラギはただ逃げるカクの後ろを黙って見ていた……噛まれた所を手で押さえると「ほう……舐めた、真似をするじゃ無いか……」

武器屋の前にいたイムラ「遅いなあ……あつ来た」

カクは真つ青な顔でやって来た

カク「……………」

イムラはカクの服装が全然変わっていないのを見て「服、買わなかったの?……………」

カク「……イムラ……」

イムラ「ん?何」

カク「俺……死ぬかもしれない……」

ポンコツ 怪しい薬を飲んだら……3

イムラ 「大丈夫？」

カク 「…大丈夫に見える？…」

イムラ 「一体何があつたの？…」

カクが答えようとすると「あつ…！魔王様」

カク 「はっ？イムラさん、そんな冗談聞きたくないんだけど…」

イムラ 「いや、冗談じゃないから！前見ろ、前！」

カク 「前？…！?魔王様！」

魔王 「……………」

イムラ 「魔王様…？」

魔王 「…イムラ…」

イムラ 「は、はい」

魔王 「カクは何処に行った？」

イムラ 「えっ…カクですか？」

魔王 「まだ家にいるのか？」

イムラ 「いえ…あの…カクならここにいます…」と、カクをチ

ラツと見た

魔王 「何？」

カク 「俺が…カクです…」

魔王 「えっ？」

今まで起きた事を説明した

魔王 「……………カク」

カク 「は、はい」

魔王 「本当にお前なのか？」

カク 「はい、俺です。」

魔王はカクをガン見してる

カク 「魔王様…さつきから俺の胸見てません？」

魔王 「えっ、いや見てない…見るわけがない…」

イムラ 「えーと魔王様、お尋ねしたい事があるんですが…その…

魔王様なら戻る方法が分かるんじゃないかと…」

魔王は即答で「私は知らない…」

カク 「あつ！じゃあ魔王様、元に戻るまで有給取って休みたいんですが…」

イムラ 「お前、有給残ってないだろ」

カク 「えっ…：…嘘…」

魔王 「姿が女になっただけで…仕事には何の問題もないだろう…」

カク 「うっ…それは…」

イムラ 「ところで、魔王様は何をしに来たんですか？」

魔王 「…お前達の様子を見に来ただけだ…」

そう言うのと、あつという間に消えた

カク 「あく！せっかく有給もらえると思ったのに！クソツ！」

イムラ 「おいっ、女性がクソツて言うなよ…」

カク 「はあく、何言つてのく俺は体は女でも、中身は男だよ！」

イムラ 「でも、今は女じゃん…」

カク 「まあくそうだけど…：…ん？…：…俺のスマホがない…：どっ

かで落とした!？」

イムラ 「えっ？スマホ落としたの…」

雨が降りだした…

カク 「あつ、雨だ」

イムラ 「今日はもう帰ろうか…：…また明日聞かせて」

カクは急いで自分の家へ…

カク 「あくあ、もうびしょ濡れだよ…今日は本当に最悪な日だ！」

階段を昇って行くと後ろから音がして一緒に昇ってくるのが分かった…振り向くとびしょ濡れのカツラギが後ろにいた

カツラギ 「貴様…おいっ、その馬鹿」

カク 「うわあああ…！なんでここにい!？」

カツラギ 「貴様の馬鹿な知り合いに教えてもらってな」

以前カクがカツラギの首を噛んだ時スマホを落とした…

カツラギ 「ん？これは…スマホ」

手に取るとすぐに着信音が鳴った…少し悩んだが「…はい…」

ミツイ 「ん？誰だお前は…」

カツラギ 「このスマホを拾ったんだ…持ち主に届けたいんだが…」

ミツイ 「あくそのスマホの持ち主なら、知っています。確かXX

X・XXXのアパートに住んでる…」

カツラギはそれだけ聞くとすぐに切った…ニヤリとして「フツ…早速今日行くか…」と、いう訳だ

カク(あの、クソメガネ！何で俺のアパートを教えただよ！)「スマホを返してください！」

カツラギ 「いいぞ、そのつもりで来たんだからな…受け取れ」

カクは警戒しながら…(腕を掴んでこないよな…)

カク 「届けてくれて、アツザース…じゃっ！」

家の中に急いで入ろうとすると「おいっ…俺がわざわざ届けてやったのに、なんだ今のは！『ありがとうございます。四天王のカツラギ様』だろうか…それなのに貴様はアツザースなどと…」

カク 「ハクシヨン！」

カツラギ 「なんだ…ハクシヨン！」

カク 「寒いし、雨もひどくなってきたので早く帰った方がいいですよ」

カツラギ 「貴様、この雨の中を帰れと…このドシャ降りじゃ帰りたくても帰れん」

カク 「四天王ならこれぐらいの雨平気でしよう」

カツラギはスマホを取り出し「魔王様に報告してもいいんだぞ…貴様が私に対して無礼な態度をとった事を…」と画面を触り始めた…

カクは焦りながら「分かりましたから！中に入ってください！」
部屋に入るとカクは洗面所へ行き「俺、こっちの部屋で着替えるから…そっちで着替えて…」（えーと、確かここにタオル……あった、あった、これを胸に巻こう……カツラギのスカートは後から洗濯に…）

カツラギは上半身裸になり「おい、私の着替えはあるのか？」

カクがカツラギの所へ行き「えっ？あるわけ無いじゃん…タオルで我慢してください」（うわあ！意外とすごい体しているな）

カツラギ「なんだ私のこの体を見て、見惚れているのか？」

カク「えっ？いや、違うけど…」

カツラギ「貴様、男性の身体を見て何とも思わないのか？」

カク「えっ？いや、全然思いませんけど…」（女に体を見せつけるお前が変態だよ）

カツラギ「恥かしがる事はないぞ、本当のことを言え」

カク「えーと…じゃあカリカリに痩せてると思ってた」

カツラギ「貴様、酷いな…私は毎日鍛えているからな…イケメンでもあり四天王でもあるしな…」

カク「でも、いくらイケメンで鍛えていても、一天王には変わらないんじゃないじゃないの？…」

一天王と言った途端表情が変わった

カク（あつ、やべー）

カツラギ「貴様…また四天王でない事を言ったな！」

カク「あゝその、つい口が…」

カツラギ「私が、一天王と言われるのがどれほどの…もし貴様が男だったら私の必殺技を喰らわせているところだ！跡形も無くこの世界から消えるぞ！」同時に雷が鳴った！

カク「うわあ！」

カツラギ「なんだ、雷が怖いのか？…」

カクは声をびびらせながら「怖く……ない……無い無い、全然怖くないし、うん…」（勇者の次に怖いのが雷…）

以前、魔王様に落とされたことがあった

カツラギ「しかし、貴様のしつぽは正直だぞ」

カクのしつぽは股に隠れていた「あっ!？」

するとカツラギは「はっはっは…貴様のびびった顔を見たら怒る気が無くなった…雷に感謝するんだな…はっはっはっははは馬鹿!」

突然真つ暗になった!

カク(ちよっ!?!えっ!何っ!停電!嘘く!ただでさえ雷が怖いのに!?)

体を震わせ座っているとカツラギがカクの体を抱きしめ、優しく頭を撫でた…「仕方ない女だ…安心しろ、もう怖く無いぞ…」

カクは少し落ち着くと、ハツと気付き「あーちよっ!?!えっ!離れて!」(俺今、男同士で抱き合ってる!?!…で、今は俺は女だった…じゃない!)

カツラギは全然離れようとしな「落ち着け、明かりがつくまで待て」

カク「はっ?何言ってる…」また雷が鳴って「うわあー」大人しくしているしかなかった

しばらくすると明かりが点いた

カツラギ「…もう大丈夫か?…」

カク「もう大丈夫ですから…怖くないんで離れて…」

カツラギが静かに離れる…とカクは素早く頭からコタツへダイブした

上半身だけコタツに突っ込みながら(うわあ〜!初めて抱き着かれた相手がカツラギかよ〜!)

カツラギ「おい、私の着替えは?」

つづく

ポンコツ 怪しい薬を飲んだら……4

カク 「……………」

カツラギはコタツの中を覗いた「おいつ!」

カク 「うわああ!」

カツラギ「貴様、いつまでコタツの中に隠れてるつもりだ?」

カク 「別に隠れたわけじゃない…あれだよ…コタツの中が一番落ち着くんだよ」

カツラギ「さつきは『もう大丈夫ですから』と言ってたが?」

カク 「カツラギさんいきなり抱きついてくるんですもん、びつくりしますよ」

カツラギ「あれは、貴様が怖がっていたから」

カク 「落ち着くどころか驚きますよ」

カツラギ「驚いた…なるほどな、そういう事か…私がイケメン過ぎて驚いたのか」

カク 「はい?」

カツラギ「無理もない…こんなイケメンに抱きつかれる事なんてないだろうからなあ…イケメン過ぎて嫉妬する奴等もいるからな、そいつらの始末が大変だ…まったく私はイケメンで困ってしまうなあ……って!おいつ 何処に行った!?!」

カクは風呂場に行っていた

カツラギもすぐに風呂場へ向かい「何をしている!」

カク 「うるさいなあ、風呂掃除してたんですよ…カツラギさん話長いんですよー」(イケメン、イケメンてうるさいんだよ!本当のイケメンは自分から言わないし!)

カツラギ「私の話を最後まで聞け!」

カク 「はいはい、イケメンですね…これでいいですか?」

カツラギ「貴様 ……もういい、冷蔵庫の中を見るぞ」

カク適当に答える「はいはい…えっつ!?!」

カツラギが冷蔵庫の中を覗き込む「冷蔵庫の中は…酒とツマミか

……いつも何を食べている？」

カク 「勝手に見んなよ！」

カツラギ 「何を食べているかと聞いているんだ…答えろ！」

カク 「うつつ…俺…基本料理とかしないんで、いつもはコンビニ二弁当買って食べてますけど……」

カツラギ 「貴様作った事ないのか！料理しないのは日頃だらけている証拠だ、反省しろ！」

カク （カツラギの一天王！俺の勝手だろう！）

カツラギ 「わかった…もういい…貴様は風呂でも入ってる」

カクが風呂から上がると、コタツの上に何やら料理が並んでいた

カク 「これ…カツラギさんが作ったんですか？…」

カツラギ 「四天王である私が、料理くらいできなくてどうする…それに私は料理が趣味でな」

カク 「まあ、とにかくいただきます」（自分は料理ができる自慢話か）

カツラギ 「野菜も食べる」

カク 「はいはい…うっ!?…美味い…」

カツラギはニヤリとして「当たり前だ、私が作ったんだぞ美味いに決まってるだろう… さて、風呂に入ってきて来る…その間残さず食べる」

カク 「あく、出来たら明日の朝も作ってもらえませんか？」

カツラギ 「それくらい自分で作れ！馬鹿め！」と風呂に行った

カク 「なんだよあの言い方…」（つてか俺の許可も取らないで普通に風呂に入ってるし…）

カクは食べ終わると、冷蔵庫からビールを取り出した

カク 「ちよつと遅いけど風呂上がりはやっぱりこれだよなあ…ゴクツゴクツ…ブハァー、やっぱりビールは最高だわ！」

風呂場からカツラギの声が聞こえた「おいつ、バスローブはどこだ？」

カク 「バスローブ? そんなのあるわけないですよ」
(えっ…カツラギさん家ではバスローブ…)

カツラギ 「なっ…貴様、私に何を着ろと言うんだ!」

カク 「もう適当にバスタオルでも体に巻いとけば良いんじゃないですか」

ちよつとするとカツラギが出てきた

カク (うわああ! 本当にバスタオルを巻いて出てきたよ…)

カツラギは怒ってる様子…

カク (あつ…これはマズいなあ…)「カツラギさん、ビール飲みますか?」

カツラギ 「ビール? 貴様ビールを飲むのか?」

カク 「ええーまあ…これが楽しみですからね…」

カツラギ 「仕方ない…そんなに進めるなら飲んでやろう」とカクからビールを取る

カク (誰も進めてねえし…俺のビールだぞ……)「そのビール結構強めですけど…」

カツラギ 「関係ない…これでも酒には強いぞ…それと戦闘もな」

カク 「戦闘は知らないけど…」

カツラギは一口飲むと「…安物だな…この酒は…」

カク 「…安物で悪かったな!返せ!」(カツラギいつも何を飲んでるんだ?)

カツラギはニヤリとして「貴様普通に飲んでるが…そこの飲み口、私が口にしたところだぞ…」

カクはむせつた…目をテンにしてカツラギを見た

カツラギ 「おいっ どうした?大丈夫か…」

カクは頭からコタツに潜り込み布団で唇を拭いた(うわあー引くわー)

すぐにコタツから出て新しいビールを開けた…ゴクツゴクツと勢い良く飲んだ

横でカツラギが「おいっ…貴様そんなに飲んで大丈夫なのか?」

カク 「ほっといてよ」

カクは酔ってクドクド言い始めた……

カク 「まったくスマホを届けてくれたのは良かったのに、なん
で上がり込んでるんだよ……それに公園の時といい、さっきの事も……セ
クハラだーセクハラ！」

カツラギ「公園の時は貴様が失礼なことを言ったからであって……そ
れにさっきの事は私が飲んでいたので勝手に取り上げたんだろう」

カク 「へえ……もつともらしいことを言いますねえ、他人には
『イケメンだから』とか『四天王とか』言ってますけど……所詮は一天……
言おうとした瞬間……カツラギがカクを後ろに倒した……

カツラギ「それ以上言ったら、何をするか分からないぞ……」

カクは体中が震え固まってしまい、酔いが一気に醒めた……

カツラギは首すじに顔を近づけると「キレイな首すじだな、貴様に
はもったいない……」

カクは我に返り「ちよつ……！何を!?……早く離れろ！気持ち悪い！」
カツラギはカクの首すじに強く噛みついた！「いつ、痛い!?……」
血がにじんで……首すじに痕が残った

柔らかい頬を優しく掴む……カクは右手で顔を殴ろうとしたが、カ
ツラギに手を抑えられてしまった

カツラギは静かな声で「もうその口で、一天王と言えないようにし
てやるから……覚悟しろ……」

カツラギの唇がすれすれまで近づいてくる……

カクは大声で泣きわめき始めた「うわあ……あ……!!」

カツラギは慌てて「おっ・おいつ・静かにしろ……」

カクの唯一の魔法『泣きわめく』を使った!

あまりにもうるさくて「分かった何もしない……だから泣きわめくな
!」と耳を抑える

カクは少しずつ静かになっていった「うっ……う……ヒック……」

カクは泣き疲れて眠ってしまった……そしてその横にはカツラギが
いた……

番外編 夏海 前編

カクとイムラはベンチで休んでいた

カク 「夏だなあ、あゝアイスうめ〜……………アイスうめ〜」

イムラ 「同じ言葉を繰り返して楽しいの？」

カク 「いやゝイムラさん、暑い中この冷たいアイス最高だよ
ね」

イムラ 「そうだけどさあ、仕事もしようよ」

カクは急にイムラを見て「そうだ！」

イムラはびくつとなり「うわあいきなり何？」

カク 「海に行こう」

イムラ 「えっ、海に…突然どうしたの？」

カクは真顔で「『夏』と言ったら海に行つて、アイス食べるんだよ！」

いきなりの【海】発言に「でも、仕事は？」

カク 「有給とればいいし、大丈夫だよ」

イムラ 「有給つて……………残ってるの？」

カク 「…多分ね…」

— 後日 —

イムラ 「平日なのに結構混んでるね…」

カク 「海だぁー…！…！」

イムラ 「うわああ!!びっくりしたあゝいきなり大声で叫ぶな
！」

カク 「あつごめん」

イムラ 「ったく…来たのはいいけど何する？」

カク 「んゝそうだなあ…まずアイス食べよ」

イムラ 「えっ…またアイス？」

カクとイムラは海の家でアイスを買った

カクはアイスを食べながら 「あゝうめえ〜……………」

イムラ 「アイス食べ終わったら海に入る？」

カク 「えっ…何で？」

イムラ 「はっ？有給まで取って何しにここまで来たの」

カクは真面目に「海でアイスを食べる為でしょうか」

イムラは少しむっとして「アイスを食べるための有給って何？それだけの為に…」

カク 「イムラさんは海に入る気だったの？」

イムラは袋を握りしめ「その為に水着も日焼け止めも用意してきたんだよ」

カク 「えっそうなの……じゃあ泳ぎますか…」

手ぶらのカクを見て「ところで水着あるの？」

カク 「…ないけど…」

イムラは海の家を指さして「あそこにいろんな水着売ってるから、買ってきたよ」

カクは色々見たが面倒になって…適当に選び着替え室に入った

先にイムラが着替え室から出てカクを待っている間、店内を眺めていると見覚えのある後ろ姿が……

視線を感じてカツラギが振り向いた

イムラ 「あっ…カツラギさん、どうも」

カツラギ 「…こんな所で会うなんて奇遇だな…1人で来たのか？」

チラツと着替え室の方を見て「いえ…もう1人…」

カクはカツラギがいるとは知らずに「イムラさん見てくださいよ、この水着エロ過ぎ〜www」とはしゃぎながら着替え室のカーテンを開けた

イムラは苦笑いし「うん、確かに……」

カツラギは戸惑いながらも「………あああそうだな」

カク 「………」着替え室のカーテンを閉めた

カツラギ 「さっ、さて私は戻る…向こうでカザミとカイドウが待ってるからな」とその場から去った

イムラ 「カクさん、もう出ても大丈夫だよ…」

気分が悪いカク「イムラさん！どうしてカツラギさんがいるって言

わなかつたんだよ!!」

イムラ 「ごめん、いきなり現れたからさあ…教える暇が無かつた…本当にごめん…」

カクは頭を抱えて「ああ…なんでカツラギさんがここにいるんだよー」

イムラ 「私達と同じく有給取って遊びに来たんじゃない」

カク 「1人で?」

イムラ 「カザミさんとカイドウさんも一緒に来てるらしいですよ」

カザミ 「私の事呼びましたか?」

カク・イムラ「うわっ…」

カザミ 「さっきカツラギさんの様子がおかしかったのは、あなた達のせいだったのね」

カク 「私たち何もしてませんよ…ねえイムラさん」

イムラはドキドキしながら「…うん…たぶん…」

カザミはカクをじゅつと見て「それにしてもあなたの水着…卑猥ね…」

カク 「はあ…いきなり何?」

イムラは小声で「やっぱり…」

カザミ 「そんな露出が多い水着で恥ずかしくないの?」

カクは胸を張って「別にいいじゃん、どんな水着を着ようが」

カザミ 「私の忠告を無視すると…地獄に落ちるわよ!」

イムラ（…忠告なの…）

カク 「占い師かよ…」

カザミ 「本当にいいの?…材料が余ってしまいそうだから一緒にBBQをしようと思ってたけど…その水着じゃ…」

イムラ 「食べ物につられちゃだめだよ…カクさん」

カク 「でもイムラさん…俺、肉食いたいな」

カザミ 「私はいいんですわよ、無理に来いって言うてるんじゃないんですわ」

カクはもうすでによだれを垂らし「イムラさん…ごめん…肉を食わ

せて下さい」

イムラ（初めからわかっていたけど……チョロかったなあ…）

カザミ 「それじゃあ…私が水着を選んでくるので着替え室で待っているのですわ」

カクは言われた通りにカザミが持ってきた水着に着替えた

その頃、浜辺ではカツラギとカイドウがパラソルの下「カザミの奴遅いな〜」

サングラスをかけたカツラギはうわの空で「ああ〜そうだなあ」

カイドウ（カツラギさん海の家から帰って来てから様子が変だなあ〜）

カザミ 「遅くなつてすみませんわ」

カイドウ 「遅かったなあ…何してたんだよ」

カザミを見ると後ろに見慣れた2人…

カツラギ 「な、連れて来たのか!!…」

カクの水着が卑猥（ほとんど紐）？可愛い（フリルのついたビキニ）に変わっていた

カクはニコニコしながら「BBQ食べるまでお世話なりま〜す」

イムラ 「〔肉〕狙いは隠さないんだね」

カイドウは不満そうに「は？こいつらと食べるのかよ」

カク 「そんな言い方しなくてもいいじゃん……」

カツラギは立ち上がり「貴様らなぜBBQする事を……カザミが教えたのか…言っておくが、肉は3人分しかないぞ…」

カイドウ 「えっ3人分？6人分あるじゃあないか…」

カツラギは慌てて「バカ、こいつらがいる前で言うな!」

カザミ 「本当なら山田さんや謎の男も来るはずだったので来られなくなつたんですわ」

イムラ 「それにしても、6人分って多いですね」

カク 「そんなに肉があるんなら食べきれないでしょう、もつたいないから俺たちにも分けて下さいよ」

カツラギ 「ダメだ!」

カクは少し甘えた声で「そんな固いこと言わずに肉を食わせてくださいよ〜」

イムラ 「カク、ダメツて言ってるんだからダメなんだよ…諦めよ」

カク 「イムラさん!？」

カツラギ 「貴様の友達もあ言ってるんだ、諦めて帰るんだ」とカクは涙目になった「お、お肉…:食べたいよ〜」

イムラ 「だだこねる子供かあ？」

カツラギは冷たく「泣いても無駄だ…」

カクは「必殺技なきわめく」を使った

イムラ（…ここで使うの…）

カザミは耳をふさいで「やかましいですわ!」

あまりにもうるさいので周りからジロジロ見られ…:

カツラギは眉間にしわを寄せ「あーうるさい!わかった食わせてやる」

その言葉にピタツと泣き止み「えっ本当ですか?」

カツラギ（こいつ…）「本当だ」

顔がパツと明るくなり「やったー!!」

カイドウ 「えっいいのかよ!」

カツラギ 「…四天王の名に傷がつくよりました」

B B Qが始まった

カク 「うめえ〜肉うめえ〜」次から次へ口へ放り込む

イムラ 「ちゃんと噛めよ」

カツラギは呆れて「どれだけ肉を食べてなかったんだ…」

カザミ 「ちよつとー!そんな食べ方したら喉に詰まるわよ」

言われて直ぐに「!!うぐっう〜」カクの顔色が変わった

イムラは慌てて「早く水を飲んで!」

どうにか肉を呑み込んだが、苦しそうに「…イムラさん、もうちよつとだけ背中をさすって…」

カクをさすりながら「落ち着いて食べなよ、誰も取らないんだから」

ほとんどの材料を食べ終わり、カザミとカツラギはBBQの片付けを…後の3人は海で遊ぶことになった

片付けをしながら「カザミ、何故あの2人を連れて来た？」

カザミは顔色一つ変えずカツラギをみた「材料が余ってたから…それだけですわ」

カツラギ 「……」

BBQの片付けも終わり「さて…私も海に入るか…カザミ、お前は どうする？」

カザミ 「私はここにいますわ」と言っつてパラソルの下に寝そべった

イムラ ・カク・カイドウの3人はビーチボールで遊んでいた

カク 「カイドウさん下手ですねえ、全然ボールに触れてないじゃないですか」

カイドウはイラツとした

イムラ 「またそんな挑発的な事を…」

カイドウにボールが来た【必殺技】『超ウルトラスーパー水スラツシャー!!』声とともに、竜巻で水柱がたちボールが巻き上げられていった

カクは大声で「何してくれてんだよっ！ボールどっか行っちゃったじゃない…」

カイドウ 「…俺様に向かつて下手って言うから悪いんだよ」

カクはしらっと「だって下手じゃん」

上を見ていたイムラ「あっ…戻ってきた」

ボールは丁度カツラギの頭に落ち「何だ！どうした？」角に刺さり破れてしまった

カツラギは頭からボールを取ると「おいっ！何故ビーチボールが？」

カクはチラツとカイドウを見て「あくあ、壊れちゃったよくカイド

ウさんが必殺技を使うから〜」

カイドウ 「えっ…お前が俺様に下手って言うから…」

2人が言い合っているのでカツラギはイムラに「いったい何があった?」

イムラが説明する……

カツラギ 「…幼稚園児並みだな…」

イムラは2人の間に入り「まあまあ…ボールの事は忘れて…別の事しよう」

カク 「別の事って何?水の掛け合い?」

カツラギはニヤリとして「面白い事を思いついたぞ…」

カク・イムラ「何?」

カツラギはカクに近づくといきなりお姫様抱っこをした

カク 「えっっ!?!」

イムラとカイドウはあっけにとられ見ている…するとカクを投げ飛ばした…カクは受け身をとることもできず顔面から海に入ってしまった

カツラギ 「はっはっは…真顔になりおって」

イムラがすぐに駆け寄り「大丈夫?」

カク 「ゲホッゲホッ!鼻に水入った、ゲホッゲホ…」

カイドウ 「はっははっは!面白!」

カツラギ 「……………ん?どうした」

カクは青い顔で「上の水着……………どっかいった…」

イムラ 「えっっ…」

カツラギ 「どうした?」

カイドウ 「ああ、水着の上を無くしたのか?それってヤバくね」

カク 「こんな事になったのはカツラギさんのせいだし探してよ」

カツラギ 「うっ…わかった…探しに行くからそこで待ってる」

カイドウ 「俺も探しに行つてやるよ」と言うと潜つて探しに行つた

カク 「まったくカツラギさんのせいで酷い目にあつた」

イムラ(元はと言えばカクさんのせいだけだね)「…とにかく海から出て待ってよ」

カクとイムラが話をしていると

ヤンキー①「ねえ、その可愛いくお嬢ちゃん達」

サングラスのヤンキー「俺たちと遊ばない？」

ヤンキー②「うおお、結構可愛いじゃん」

カクは小声で「イムラさん、この人達もしかして俺達をナンパしているの？」

イムラ「たぶん…そうだね」

ヤンキー④「何ヒソヒソ話してんの…」カクが胸を隠しているのを見て「おっつ…ねえ角の生えた獣のお嬢ちゃんく水着着てないの？」

カク「……」

イムラ「ほつといて行こうカクさん」

ヤンキー①は素早くカクの後ろに回り込み肩を押さえ面白がって

「下の水着を外せ！」

ヤンキー②「えっ…いいんですか」

イムラが叫んだ「カク!!」

ヤンキー③はイムラの腕を掴んで「黙ってる！おおく、見ろよこいつの肌スライムみたいに柔らかいぞ」

ヤンキー④「マジで、俺に触らせろ！」

カクが暴れるが強く抑えられ動けなかった「やめろ！汚い手でイムラさんに触れるなー！」

「うるせー！」と口をふさがれた

カツラギ「おいっ…そのバカ共何をしている？」

みんなが声の方を見た

ヤンキー③「誰だあこいつ？」

ヤンキー④はサングラスヤンキーの方を見て「どうする？」

サングラスのヤンキー「適当にびびらせて追い払え」

カツラギ「おいっ聞こえないのか？何をしてるか聞いているんだ」

ヤンキー①はカクを押さえつけながら「うるせー！俺らは取り込み中なんだよ！邪魔すんな！」

ヤンキー②「それとも、この女の知り合いか？彼氏か？」

カツラギ「…どっちとも違う」

ヤンキー④はカツラギの顔に近づき「じゃあ！怪我しないうちにとつとと向こうに行きやがれ！ツノ折るぞこのトマト野郎!!」

カツラギ「…分かった」と言つて背を向けた…途端に水面から尻尾が現れてヤンキーの1人を吹き飛ばす…と他のヤンキー2人にぶつかり合った

サングラスのヤンキー「なっ何だ!?!」

ヤンキー③はイムラを離すと「こ、こいつー!」カツラギに殴りかかったが軽く受け止められ、逆に平手打ちを食らいその場にうずくまってしまった

サングラスのヤンキー「おいっどうした…あのくらいで…」

ヤンキー③が振り向くと下顎がずれていた!「あっああーひでえ!」

カツラギが1歩前に出るとヤンキー達は後退した…周りの温度が下がったかのようにヒヤツとし始めてカツラギの目が紅く変わっていった

ヤンキー達は金縛りにあつたように動けなかつた…

カツラギ「…貴様ら…」

カイドウが突然現れて「必殺技」『超ウルトラスーパー水スラッシュャー!』ヤンキー達は竜巻に乗つてどこかへ飛ばされて行った「大丈夫か?」

カクは胸を押さえながら「は、はい…何とか…イムラさんは?」

イムラ「大丈夫…体を触わられたのは気持ち悪かつたけど…」

カイドウ「まったく最低だよな…でももう大丈夫だぜ、彼奴らなら俺の必殺技で倒しちまったからな」と得意げに言った

カツラギ「こんな事くらいで必殺技を使うな」

カクはハツと気が付き「ところで俺の水着見つかったの?」
ばつが悪そうにカツラギが「探したが無かつた…」

カク 「えっ、無かったって…」

カイドウ 「俺も探したけど見つからなかったぜ…」

4人が砂浜に向かって歩いて行く時、カクが小声で「ねえ…カツラギさん結構強かったね、イムラさん」

イムラ 「まあ、一応四天王だからね」

カク 「そのセリフ…イムラさんが言う？」

4人が砂浜に上がるとカザミが「何かあったんですの？」

カツラギが説明する「ふくん…そんな事があったんですの…ところで…」

カクのお尻を見て「そのシッポに絡まっているのは何ですの？」

カク 「！あっつ…何コレ…いつの間に…」

みんなは呆れた様子でカクを見た…と、カツラギが近づいて行った

カクはびくつとして（うわっつ…怒られる）目の前まで来ると手を挙げ（うっ 殴られる）と思ったらデコピンをされた

カクはおでこを押さええてうずくまり「痛っつ…」

カツラギは顔を覗き込み「バ・カ!!」と言ってパラソルへ戻っていった

カイドウ 「本当にバカだな…俺とカツラギがあれば探しまわったのに…後で夜店でりんご飴・チョコバナナ・ベビーカステラ買えよ！」

イムラ・カク「えっつ…夜店？」